

多摩地域における古代・中世の「独立」気風

2010/09/18 多摩学発表資料

多摩大学 地域活性化マネジメントセンター

諸橋 正幸

概要：多摩の地政学的な位置づけを、古代から中世にかけての歴史を追うことで眺め、多摩独自の「独立」気風を探る。多摩の気風として見えてきたのは、

- ・個人（一族）の財産保持・拡張に対する偏執狂的努力＝一所懸命
- ・武力（騎馬での戦い）で権利を主張
- ・権力者の資質に対する偏った評価（頭脳ではなく、血筋と腕力）
- ・集団行動の欠如、個別英雄的行動

である。当然、これらは日本人として共通の気風ではあるが、それが、どのような状況でどれだけこだわりを持って発現するかは、多摩地域の長い歴史に裏打ちされたものである。

序. 多摩地域の気風を探る

本論文は、上古から中世を通じて培われてきた多摩人（多摩地域住民）の気風について論考するものである。古来(特に中世以降)、坂東の中心的存在の一つである多摩川流域は、日本の政治・経済の中心である畿内と、未開の地でありながらも地下資源（特に金鉱）豊富な奥州を結ぶ線上の中程に位置し、そのため、政治紛争の絶えない場所でもあった。そうした土壌風土の中で育まれた気風を歴史的・地政学的観点から把握し、彼らの行動形態を理解することが本稿の目的である。

1. 多摩地域の定義

論述に先だって、最初に行わなければならないことは、多摩地域の範囲を規定することである。多摩を行政区域として捉えるならば、武蔵国多摩郡¹がもっとも妥当な定義となる。この名称は、維新後の廃藩置県で4郡（東、西、南、北）に細分化されるまで²は、長らく多摩川の上・中流域に固定化されてきた呼称である。しかしながら、本稿で追及する「独自の気風を探る」というテーマを考えた場合には、気風確立の背景となる地勢的・文化的・政治的な独立性をこの地域から見出すにはあまりに狭く、より広い地域設定



図 1 多摩地域の定義

¹ 古来、「タマ」の表記は様々あり（多摩、多磨、玉、など）、正書法が定まった後も、各地にこうした別表記が残っている。

² 明治 11 年（1878）郡区町村編成法による。

が必要となる。そこで本論文では、武蔵・相模両国（現在の埼玉県、東京都、神奈川県に相当）を多摩地域と定義する（以後、「多摩」はこの広域多摩地域を指す）。

多摩の西境は関東山地であり、箱根峠や足柄峠を越えて京へと至る（いわゆる東海道）。また、南は太平洋に面しており、江戸時代に海路開拓がなされるまでは、三浦半島と房総半島を結ぶ浦賀水道が唯一の海路ルートであった。東および北東の境には旧利根川が横たわる。利根川は関東平野第一の大河であり、また、源流に豪雪地帯を控えていることから水量が多く、また氾濫もしばしば起こり、物資や軍隊の移動の点からは峠以上の難所である。特に、東京湾岸江東地区付近では他にも太日川（江戸川）、入間川（荒川）の河口が集中し、利根川の流れを変える江戸期までは、恒久的な橋も架けられない状況であった³。そのため、より確実な徒歩による渡河を行うには、浅瀬がある上流地点まで大きく迂回する必要があるが、それでも、春の雪解けシーズンや長雨の時期は、長期間足止めされる恐れは避けられなかった（江戸期の太日川の例のように）。北は関東山地の裾野を入間川（荒川）沿いに遡ることによって、比較的楽に上野の国府（群馬県安中市）に出ることができる。これは現在のJR八高線のルートと考えてよく、先に述べた利根川上流で川を渡る迂回路はまさにここを通る（深谷・前橋あたりで渡河⁴）。このルートで京へ至るには、碓氷峠を経て信濃国経由で東山道に行くか、三国峠を経て越後国経由で北陸道に行くことになる。ただし、三国峠は豪雪地帯を抜ける道で、冬場はほとんど通行不可能となる。

2. 多摩の地政学的位置づけ

2. 1 行政区と街道

古代律令制に基づく列島の行政区分は「五畿七道⁵」に分けられ、多摩を構成する二国のうち、武蔵は東山道（平安朝以降は東海道に編入される）、相模は東海道に属する。したがって、各道内の国府と京を結ぶ街道（京へ年貢＝租庸調を送る主要ルート）としての「東海道」、「東山道」を見てみると、現在とは経済的重要性においてかなり異なっている（図2参照）。

「東海道」は相模国府（国衙跡が発見されておらず、海老名市、大磯市など諸説ある）へ至った後、三浦半島から海路房総半島へ抜けることになる⁶。房総半島の国名が現在一般

³ 当時の大河の渡河方法としては、底の浅い渡し舟、または、船をつなげて上に板をわたす船橋があるが、馬や重い荷物を運ぶには不向きである。

⁴ 中瀬の渡（深谷市）、橋瀬、田口之瀬（共に前橋市）など

⁵ 五畿は大和・山城・摂津・河内・泉、七道は東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道である。現在のように、道は道路を表すわけではなく、地域を表現するもの（北海道はその使い方が今でも残っている）だったが、道に属する各国の国府を繋ぐ街道をやがて「××道」と呼ぶようになった。

⁶ 歴史上、このルートが注目を浴びる出来事が2つある。一つは倭建命東征の際の「それ（焼津）より入り幸でまして走水（浦賀水道）の海を渡りたまひし時、その渡の神、浪を興して云々」（『古事記』一弟橋ひめの入水）であり、もう一つは、源頼朝が石橋山の戦いに敗れて上総広常を頼った例である。

的な湾岸沿いに辿ると、京からみた順序が下総・上総と逆に並ぶことになるが、古代「東海道」ルートでは、ごく自然に手前が上総、奥が下総となる。

東山道」ルートは上野国から下野国へ向かう道筋（後世まで残ったルート）と、上野国から武蔵国へ向かうルート（武蔵路）がある。先に述べた通り、武蔵国はやがて東海道に属することとなり（771年）、国衙のある府中と相模を結ぶルートが主要道となるが、武蔵路も依然、重要な街道として後世でも利用されている⁷。逆に武蔵一京間の実際の人・物の流れは必ずしも所属地域内を通らなければならないというわけでもないので、武蔵国はまさに、「東山道」「東海道」両ルートを自由に選べる便利な場所に位置するとも言える。



図 2 古代の街道

関東平野と外界との関係について概観すると、街道の要として、上野国国衙（群馬県安中市）が注目される。ここは、信濃、越後、陸奥と通じる街道のハブにあたり、また、武蔵国を経て東海道へ出ることできる。海上航路が未発達な古代・中世では、山越えが必ず必要になる。東海道を西へ向かう際に通る足柄峠とその迂回路となる箱根峠、甲斐路の大菩薩峠、東山道を西へ向かうと碓氷峠、北東へは奥州に通じる白河関、北方へは三国峠など、山越えの難所がある。ここを無事に通る際に必要とされる地元民ガイドに対するガイド料（後の通行税）がこれらの地域を潤すこととなったが、しばしば治安悪化の原因ともなった（「倭馬の党」による年貢略奪）。

2. 2 多摩の主産業と生産地

中世以前の日本の多くの地域がそうであるように、多摩においても主産業は米作であった。米の収穫量で区分された律令時代の分類⁸によれば、武蔵は最上位の大国に、相模は2番目の上国に属する。坂東全体を見ても、他の地域に比べ豊かで、後に分割された安房国を除けばすべて、上国以上である。

水田耕地の分布をみると、東京湾岸に近い平坦な沼沢地よりも山地や丘陵の裾野あたりに多い。これは当時の治水土木技術の未熟さを反映するもので、稲の成育に合わせて田に引く水の増減（最後には完全に抜き取る）を調整するには、天候や季節によって水量が大きく変化する大河の中・下流域よりも、たとえ全体の水量が少なくともコンスタントな水流が見込まれる山の麓の小川や湧き水の方が有利である。さらに、田自体に緩い段差があ

⁷ 後の鎌倉街道上道がそれにあたる。元弘の変（1331）における新田義貞の鎌倉攻めもこのルートが使われた。

⁸ 大国、上国、中国、下国の4つである。坂東では、常陸、上総、上野、下総、武蔵が大国（うち、常陸、上総、下野は親王任国）、相模、下野が上国、安房が中国である。

れば、さらに水管理は容易になる。これが、府中・日野・八王子を中心に多摩川上・中流域や秩父盆地などに耕地が広がった理由と考えられる。ただし、こうした場所では、大規模水田の開拓は困難で、下総から常陸にかけての水郷地帯（水量が豊富で水位も安定している）のように大きな村落や荘園ができなかった⁹原因ともなっている。

起伏は多いが高い山はなく草原が広がる多摩は、馬の産地（放牧中心）としても知られており、特に、秩父氏が代々別当¹⁰を務めた秩父牧、日奉氏の管理する武蔵四牧（石川・小川・由比・立野—立川、八王子、あきる野一帯に点在）や小野氏の小野牧（日野市）などでの馬牧はよく知られている。種馬としては、当初、奥州産のものが優秀とされていた¹¹が、坂東の地で放牧され軍馬としての訓練をすることで、しだいに軍馬生産の地としての位置付けが強まった。

2. 3 中央政権、国衙、土豪

律令制のもとでは、すべての農民は大和政権から田（口分田）を与えられ、その収穫の中から一定量（出来高の割合ではなく、田の大きさに合わせた絶対量）を税として納める形をとるが、農業が本質的に労働集約型の産業である以上、労働力の多寡（たとえば家族の人数）が貧富の差に繋がる。税徴収に耐えられなくなった家は、次の年の種もみを残す余裕がなく、翌年に高利で借りるか、場合によっては田を放棄して逃亡する状況に追い込まれる一方、富める者は秋になると、春に貸した種もみの何倍もの量の収穫を自分の手をかけずに得ることができるようになる。さらに、多摩をはじめとする板東一円は都から遠いこともあって、現地に派遣された守、介職にある者（各国の官僚トップ＝受領）の独断でもものが決まるケースが多く、公正な判断を求めべく、都に訴えに出ている間に田畑を根こそぎ取られてしまうという場合すらある。そこで、地元の富裕層（土豪）は直接受領と武力を使って決着をつけることもしばしば起こり、ときによると土豪達が国衙を襲い、国庫に納めた米を掠奪するケースまで頻発するようになる。

さらには、都で任命される国司達にしても、高級官僚は、朝廷に留まり出世の算段に明け暮れて任地には赴任しない¹²。逆に、赴任する、中央で出世の見込みのない官僚（受領）は、ひたすら赴任地での蓄財に励み、税の中間搾取をしたり、有力土豪が開発した新田を国のものとして課税対象にしようとして、地元富裕層と対立することになる。さらには、任期満了した受領の多くは都へは帰らず、着任中の隠し財産をもとに私営田経営に励み、

⁹ 荘園を核にして発展した武士団（党）の中で、多摩を中心に活動したものには、秩父党（秩父盆地から新座、豊島、葛西あたりを中心にした血族関係のグループ）、武蔵七党（府中、八王子、日野を中心とした中小のグループ、鎌倉党（鎌倉を中心にした血族関係のグループ）などがあり、規模こそ小さいが、戦乱の中で名を残した人物（英雄）は多い。

¹⁰ 官営の馬牧で馬の管理・調教を行う役所の長官

¹¹ 明治の初期まで宮中で行なわれていた正月の慣例行事である白馬節会あおうまのせちえが始まったきっかけは、奥州から献上された青馬であったといわれている。

¹² 常陸、上総、下野は親王任国のため、皇族の一員が守になる。彼らが任地に赴任することはありえない。

地元の土豪となって新任受領と対決することすら珍しくはなかった。

こうした激しい土地争いの中で、中央の政治力とは関係なく自分の田畑（財産）は自分で守る、あるいは、力の弱い一族からスキを狙って土地をかすめ取ることが当たり前の状況が生じる。その結果として、自衛権を確立するための武力の自前調達（一族の中で戦いに優れた者たちの専門武士化）や親戚・近隣の者同士が団結して党を作る動きが生じる。

有力な党（＝財産を十分にもった豪族）が生まれるには、潤沢な田畑が必要条件となるため、板東一円で最初に有力豪族が生まれたのは水郷地帯（下総・常陸）であり¹³、多摩の党は中世に入るまでは、（いくつかの党が団結しない限りは）豪族に匹敵するような大きな勢力になることはなかった。

時代が下ると、中央政権の締め付け・統治力が強くなる時期が何度かやってくるが、このような時に自分の土地を護る手段として板東の豪族達が行ったのは、中央政府の有力者にその武力を認めてもらって国衙の役人としての地位を得る、または、自分の土地を有力者に寄進して¹⁴安全を確保するなどであった。しかしながら、覇権争いによる中央有力者の浮き沈みも激しく、政変のたびに敵方に土地を没収される危険は避けられない。そのため、土豪達は中央での政局には敏感で、危険を察知すると寄進先を取り替えるというような行為がしばしば生じた。

2. 4 奥州との関係

古事記や日本書紀に記載されたこと¹⁵を信用するなら、南九州（熊襲）が平定されたすぐあとに、板東も大和政権の支配下に入る。律令体制が確立するのはそれからしばらく経ってからであるが、その頃になっても、この2地域に対しては、徴税・兵役の負担で明らかな差別が行われていた。さらに、その後大和政権は奥州への侵略を積極的にすすめることになるが、その際の徴兵先¹⁶、出陣の準備先として板東が重要な地位を占めることになる。また、出兵の際の軍装は自前という立場をとったため、板東の武器、防具、乗馬の技術等が実戦を通して発達することになった。奥州への侵略は、当初（奈良、平安初期）は大和政権主導であったが、後には、有力武士が侵略を受け継ぐこととなり、これは頼朝の時代まで続く。

2. 5 貴種崇拝、婚姻形態

主に土地にからむ紛争は最終的には当事者間の武力の優劣で決まるケースが多いとはいえ、政権に近い京人と姻戚関係を持つことで、中央での訴訟判決に有利な裁断を得れば、それを錦の御旗として味方を増やすことが可能になるため、地元豪族は天皇の親戚（王）

¹³ 平将門の祖父にあたる高望王（平安中期・上総介）が有名

¹⁴ 形式的に中央有力者の土地とし、一定の年貢は納めるが、土地の管理者として従来通り残りの収穫は手にする。

¹⁵ 倭建命の東征。「ここに天皇（景行天皇）、また頻きて倭建命に詔りたまひしく、『東の方十二道の荒ぶる神、また伏はぬ人等を言向け和平せ』とのりたまひて云々」（古事記）

¹⁶ 将軍は京で任命するが、軍隊の多くはその遠征路で徴兵する。中央政府は、あらかじめ街道沿いの国衙に徴兵の通達（天皇の宣旨）を出し、徴兵できる軍の規模を調べる。

や京の貴族との婚姻を通じてコネを作ることを重視した。この場合、国に赴任する国衙の高位役人（守、介など）が婚姻対象になるケースが多い。

都の役人が地元の女性と結婚し子供をもうける場合、当時の婚姻形態では子供は母親の家で育つことになるので、女性側の家にとってのメリットが多い。また、こうした婚姻に応ずる男性側も、都での立身出世の見込みがないため女性側の家の財産が目的になることが多く、これが、受領の土着化をうながすこととなる。また、生粋の地元住民には、都の血と肩書を重視する貴種崇拝の考え方が広がることとなった。

地方豪族の動向を探る上でこの婚姻形態を重視する（女性の側に立つ系図を作る）ことは非常に重要であるが、資料に基づく調査では女性側の系譜が残るケースはまれで、良い研究成果は出ていないようである。

3. 上古から中世にかけての歴史潮流

ここでは、前述した地政学的状況のもとで培われてきた多摩の「気風」がどのような歴史的イベントをきっかけに生まれ、強化されていったかについて考察する。

3. 1 上古～平安初期

上古（平安初期まで）において、多摩が外界から受けた大きな出来事には、

- (1) 大和政権による坂東征服（『古事記』『日本書紀』に描かれる倭建命の東征）
- (2) 朝鮮半島との緊張関係を反映した防人の派遣
- (3) 奥州征伐のための兵士・武具・兵糧の徴用

がある。

(1) はすでに述べたように、『古事記』『日本書紀』が、景行天皇の時代（4世紀頃？）に板東が大和政権の支配下に入ったと示唆している（脚注15を参照のこと）。この遠征軍は、図2にある東海道から侵入し、東山道から京に戻ったと推定されるが、これ以後、多摩は、中央集権の強化とともに、街道の整備を通して、他の地域以上の税の負担に喘ぐことになる。これが貧富の格差を増大させ、地元土豪、豪族などの誕生を促した。また、彼らの力が新たな新田開発¹⁷にもつながった。

(2) 関係の深かった任那・百済の滅亡（562, 660）、さらには、白村江の戦い（663）で唐・新羅連合軍に敗北したことで大和政権の影響力は朝鮮半島から完全に駆逐されただけでなく、唐・新羅の九州侵略の可能性を考慮しなければならなくなった。この事態を恐れた政府がとった措置に、北九州防衛のための防人の徴兵がある。防人は政府支配下の各地から徴兵されたが、とくに九州南部と板東からの徴兵が突出していた。任期は3年だが、しばしば延長され、田畑の経営の面で大きな負担となった。防人として赴任する兵士たちが残した歌の中には、単なる望郷の想いを越えて、政府への恨みの色合いを持つ、

今日よりは顧みなくて大君の醜の 御楯と出で立つ吾は

下野国火長今奉部与曾布（万葉集巻20-4373）

¹⁷墾田永代私財法（743）がこの動きに拍車をかけた。

のような歌もある。

多摩は防人派遣以外にも政府の防衛策の影響を受けている。それは、朝鮮半島からの渡来人の扱いで、新羅・高句麗人の畿内での攪乱を恐れた政府は、彼らを武蔵国に強制移住させた¹⁸。

(3) は陸奥をおもなターゲットとする大和政権の侵略行為である。坂上田村麻呂¹⁹の遠征(801)で胆沢城(岩手県奥州市)に鎮守府が置かれ、大和政権の支配権は一応確立するが、その後も、しばしば反乱に悩まされることになる²⁰。大和政権と奥州との軋轢の中で、武蔵は前線基地のひとつとして、馬牧や小規模な製鉄所が設置され、軍備の自前調達²¹の道が開けた。また、陸奥の中心である北上川流域へ屯田兵として田畑開拓を兼ねて武蔵国の住民を派遣し、また、陸奥の俘囚(夷俘)を武蔵へ移住させるなどの策がとられた。これにより(2)で述べた渡来人の移住とともに、異文化の導入が大規模に行われ、多摩の管理・生産技術や文化の発展に寄与したものと思われる。

3. 2 平安中期

受領の土着化が盛んに進み、大きな荘園での武装集団(武士)が形成されたのは平安時代中期からである。彼らの戦術は騎馬戦であり、馬上からすばやく弓を射ることが重要な技術とされ、日夜、その稽古に励んでいた。

彼らの中でも注目を集めたのが桓武天皇(在位781-806)の血をひく高望王(平高望)の一族で、一族間の土地争いがやがて政府に対する反乱(平将門の乱-935~940)となり、武蔵国もそれに巻き込まれることになる²¹。

将門が勢力を拡大した背景には、大和政権の土地政策に不満を持つ中小の土豪が、現状を打破する新たなリーダーとして将門に期待をかけた(新皇宣言)結果であり、また、短時間で政権が崩壊した(京から討伐軍が派遣される前に、下野の藤原秀郷²²に討たれた)のも、新皇になった後も将門が一族の内輪もめにしか興味を示さなかったことによる。こ

¹⁸ 高麗郡、新羅郡(その後、新座郡になる)がそれにあたる。

¹⁹ 征夷大將軍であり、鎮守府將軍。都では英雄として人気があり、能『田村』では、自らが英雄譚を語る。

²⁰ 元慶の乱(878)が有名。出羽国衙であった秋田城が占拠され、小野春風を將軍とする遠征軍が派遣されたが、武力による完全鎮圧ができず、反乱軍を懐柔することでやっと事を治めた。なお、小野春風は小野妹子の末裔。一族には小野篁、小野道風、小野小町などがいる。ちなみに、小野篁を祖とする一党に横山党(横山・猪俣氏)がある。「横山」は多摩丘陵の古名である。また、歌舞伎『毛抜』に登場する小野春道館の主人春道は春風のことと言われている。

²¹ 『日本略記』に「下野豊田郡の武夫、平将門並びに武蔵権守従五位下興世王等を奉じて謀反し、東国を虜掠す」とある。将門は鬼怒川の砂鉄と猿島の長州牧をおさえることで騎馬を中核とする優れた軍事力を持つに至った。乱の経緯は『将門記』に詳しい。

²² 朝敵将門を倒した英雄として京都でもてはやされ、百足退治などの英雄譚が生じた。「俵藤太」と呼ばれたため、

将門は こめかみよりぞ 斬られける 俵藤太が はかりごとにて(俵藤太物語)のようなダジャレに近い歌が作られたりしている。

ここで重要なことは、乱のどちら側に与したにせよ、武士団の長（強い血族関係にある一族の代表＝惣領）は、リーダーとの主従関係があるわけではなく、自分の判断（どちらの側につくと自分達の土地が護れるか）で行動していたということである²³。後の時代になるとリーダーたちは家臣団を形成することになるが、それでも、中小武士団の惣領が状況に応じてリーダーを変える（時によっては裏切り行為となる）行動は、それほど激しく非難されるべきではないという考えが根強く残ることになる。

この乱に巻き込まれた国々（上野・下野・常陸・上総・下総・安房・武蔵・相模の八カ国）は、これ以後、板東と呼ばれ（後の関八州、現関東地方）、それぞれの住人たちにも一つの政治圏として意識されるようになる。また、将門の一族の中で、彼と対立した国香・貞盛²⁴の末裔からは、伊勢平氏が誕生し清盛に繋がる。また、内輪もめに加わらなかった高望の息子（五男？）良文の子孫は板東一体に勢力を広げ、やがて板東八平氏²⁵と呼ばれるようになる。

乱鎮圧後、朝廷側にたった中心人物の藤原秀郷が中央政権に取り込まれ、京都でもてはやされたのとは反対に、板東では、将門の人氣があがる。大手町の「将門首塚」や神田明神の伝説²⁶、あるいは歌舞伎『関八州繫馬』の滝夜叉姫など後世にまで伝わる逸話・伝承が関東には多い。

3. 3 平安後期～鎌倉

「平将門の乱」が朝廷を震撼させた結果として、板東の武士団が京都で傭兵として働くケースが増える。その朝廷での板東武士団を束ねたのが、清和天皇（在位 858－876）の血を引く源満仲とその子供たちである。満仲は板東には荘園を持っていなかったようだが、武蔵国の守として着任したことがあり、その間に彼らの信頼を得たようである。京都での鬼退治の伝説をいくつも持つ満仲の子頼光と四天王の活躍²⁷などはその好例である。

板東の地で清和源氏が活躍するのは、頼義・義家父子の時代の前九年の役・後三年の役（1051～、1083～）である。この2つの事件は、頼義・義家が奥州に支配権を確立したいという欲望から起こったものだが、この両役における討伐軍の旗揚げは、鎌倉（源氏山）や府中（大國魂神社）で行われ、ここから白河関を経て陸奥へと進軍した²⁸。結果として

²³ 一種の同盟関係であり、彼らを「伴類」と呼ぶ。

²⁴ 乱の鎮圧後、朝廷より従四位下を賜り、以後板東を離れ主に畿内で活躍する。

²⁵ 八平氏は必ずしも固定された八家ではなく、「多くの」という意味合いで使われている。このうち、多摩に勢力を伸ばした氏族としては、秩父・畠山・河越・江戸・豊島・葛西・鎌倉・三浦・大庭・梶原氏などがおり、多摩の中ではいずれも有力な武士団である。

²⁶ 将門の首なしの身体が埋められた場所で、カラダ→カンダとなったという。

²⁷ 御伽草紙の『金太郎』『大江山酒呑童子』、能『土蜘蛛』、平家物語『一条戻橋』、歌舞伎『茨木』など。また四天王には明らかに板東出身と思われる人物として渡辺綱（港区三田綱町）、坂田金時（足柄郡金時山）、碓井貞光（碓氷峠）がいる。

²⁸ 『陸奥話記』『奥州御三年記』に詳しい。また、『今昔物語』にも、京都から観た事件の顛末記述がある（巻 25 第 13）。また、前九年の役の後日談にあたる物語として文楽『奥州安達原』がある。

遠征は失敗し、彼らの野望は挫かれることになるが、参戦した多摩武士団は、「所領安堵」という観点からは一定の目的を果たし清和源氏との結びつきを強めることとなった。特に後三年の役で活躍した鎌倉権五郎景正²⁹は、弱小武士団であったにもかかわらず義家のバックアップで相模の有力な豪族となり、鎌倉党と呼ばれる氏族の祖となる。なお、後三年の役は奥州清原家の内輪もめに乗じて義家が侵略した戦だったが、義家が肩入れした清原清衡（後に母親の先夫の藤原姓を名乗る）が実質的に奥州の支配権を手に入れ、奥州藤原氏の祖となる³⁰。

その後、義家は京都で力を持ちすぎたことで白河上皇に睨まれ³¹、保元・平治の乱（1156、1159）で没落し、平氏の天下となるが、わずか20年後の源平合戦（1180-1185）で源頼朝が再び天下をとることになる³²。この源平合戦の後の頼朝の周辺の行動を見ると、それまでとは明らかな違いが見られる。頼朝は鎌倉で政権を確立した後、それまでの坂東武士団のリーダーと異なり、伴類として行動を共にしてきた有力武士団の惣領を騙し討ちの形で殺す（殺させる）。上総広常、河越重頼の一派はこの形で姿を消すことになる。これは、蛭ヶ小島時代の頼朝の側近で頼朝と姻戚関係を持つ北条時政が、実質的な幕府のトップに躍り出るとますます顕著になり、時政と同僚の関係にあった伊豆の工藤祐経³³、多摩の武士団である梶原景時、比企能員、畠山重忠、和田義盛、朝比奈義秀、横山時兼など源氏の伴類の地位（と当人たちは思っていた）にあった有力武士が次々と粛清され、この行為を通して、北条氏は主君（頼朝以下三代の後は摂家将軍、宮将軍といった形式的な主君）と家臣団という明確な線引きを行っていった。こうして幕府内部の立場の強化を完成させ、実朝暗殺後、北条政権は朝廷をも倒して（承久の変—1221）天下を取るようになる。ただし、こうした政権内での暗殺行為は、政権中枢における権力闘争そのものであり、今まで朝廷で行われていたものが、鎌倉幕府でも行われるようになったとみれば（ただし、京都では権力闘争に負けても殺されることはほとんどなかった）、目新しい動きとは言えない。した

²⁹ 江戸期に人気のあった人物の一人で、歌舞伎『暫』で清原武衡をへこませる場面は団十郎の家の芸となった。また、鎌倉にある御霊神社は鎌倉権五郎を祀るとされている（五郎→御霊のゴロ合わせか）。

³⁰ このことが、後に義家の子孫、源頼朝の奥州攻めの動機であるというのは少しうがった見方になるだろうか。

³¹ 義家の対抗馬として平清盛の祖父にあたる正盛を重用した。

³² この戦いの経緯は『平家物語』という第一級の軍記物語で描かれる。ここでは滅亡する平氏に多くの焦点があたる。『平家物語』とは別に、天下をとった源氏方で悲劇に見舞われた頼朝の兄弟である義経（九郎判官）と為朝（鎮西八郎）にも、後世、とんでもない伝説が生じる。義経後日談は、義経は中国へ亡命しジンギスカンという名でモンゴル帝国を打建てたというもので、為朝の後日談は、為朝が沖縄に渡り、琉球王朝を打建てた舜天の祖先となったという（『椿説弓張月』『おもしろさうし』）。

³³ 工藤祐経は、富士の裾野の巻狩で曾我兄弟に討ち取られた有名な仇討事件の敵役だが、裏で時政が糸を引いていたと主張する学者もいる。なお、曾我仇討は日本三大仇討の一つとして人口に膾炙しており、歌舞伎でもよく取りあげられる題材である（『寿曾我対面』『矢の根』『助六』など）。

がって、有力御家人（権力の座につく可能性のある武士）以外の武士がリーダーを見つけ
て所領安堵をはかる行動には何の影響もないと言える。

この時代には、さらに大きな変化がもう2つあった。

(1) 多摩武士団が得る所領の全国拡大

(2) 元寇（文永の役—1274、弘安の役—1281）に影響された戦術の変化
である。

(1) は戦場での手柄に対する報酬としての新たな領地獲得が、関東域内に限らず、全
国に展開されるようになったことである。これは、武士団にとっては魅力的な変化であっ
た（惣領が面倒をみる一族の数が大幅に増えることを意味する。すなわち、党を大規模に
できるチャンスを得たことになる）。ただし、(2) で話題とする元寇では、戦場での勝利
が、新たな領土占領にはならなかったため、それまで手柄が新たな領地獲得に繋がって
いた武士団の不満が一気に爆発し、北条政権を見放すことになる。

(2) はそれまで最強の攻撃法であると思っていた（実際にそれまでは絶大な効果を発
揮していた）騎馬戦が、元軍には通じなかったことである。それでも、関東武士団は騎馬
の戦いにこだわったが、元々騎馬の戦いが得意でなかった西国の武士たちは、新たな戦法
（歩兵に槍を持たせ、まずは馬を倒す）を見出すことになり、南北朝期を通じて、全国で
持久戦が展開される発端となった³⁴。

3. 4 南北朝、室町、戦国

後醍醐天皇による北条政権打倒の目論見（『天皇御謀
叛』といわれた）が、足利尊氏の寝返りで初めて成功し
た元弘の変（1331）で、後醍醐天皇と足利尊氏による京
都制圧と同時に、新田義貞による鎌倉制圧が起こり、鎌
倉幕府はあえなく滅亡することになる（図3）³⁵。この後、
中央政権は再び京都（六波羅）に置かれることになり、
多摩には板東十国³⁶を支配下におく鎌倉府という一地方
機関が管理することになる。

鎌倉幕府の滅亡にあたって、次の政権のトップを決め
る過程で、奇妙な現象が起きている。それは、新田義貞
に従って鎌倉攻めを行った多摩武士団の多くが、鎌倉占
拠直後に義貞を見捨て、鎌倉に残って避難していた尊氏
の家族と少数の家臣団のもとへ走ったことである。この
現象について、完全に納得のいく説明はまだ見当たらな

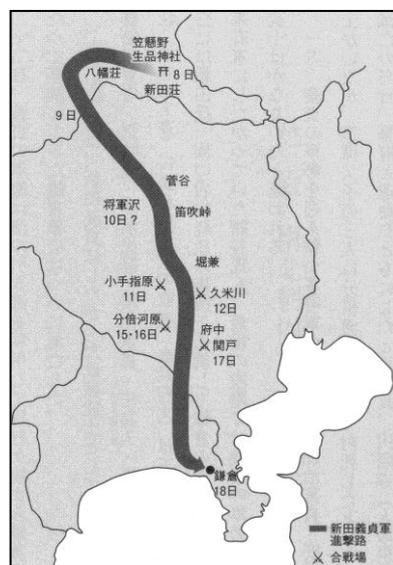


図3 新田義貞の鎌倉進撃路図

（田代脩「武蔵武士と戦乱の時代」より）

³⁴ もっとも顕著な戦法の変化は、楠正成に代表される山城籠城とゲリラ戦である。騎馬の
戦いは平原では有利だが、山間部に入ると身動きがとれなくなる。

³⁵ このとき利用された道は鎌倉街道上道である。利根川の渡河地点まで北上した後、上道
に沿って南下している。

³⁶ 従来の八国に加え、甲斐国と伊豆国が入る。

いが、唯一うなずける説明は、彼らの家柄の違いである。足利も新田も、源義家の血筋を継いでいるが、足利家は義国（義家の子）の嫡子の家柄であり、新田は庶子の家柄になる。新田義貞が、北条政権打倒を叫んで挙兵した際に、政権に対する不満から行動を共にした武士たちも、いざ、政権を倒し、次のリーダー探しに考えが及んだ時、目の前にいる義貞より、京都を占拠した尊氏に期待したとすれば、まさに、血筋が戦場での手柄を凌駕したとしか説明のしようがないのかも知れない。鎌倉で仲間に見放され次の天下の可能性を否定された新田義貞は、その後京都に向かい、尊氏と喧嘩別れした後醍醐天皇について、南朝方の戦士として尊氏と対峙することになる。

しかしながら、南北朝、室町と続く政権の移行の中で、多摩は安定した政治基盤を確立することができず（鎌倉府の長官である鎌倉公方と、それを支える補佐役の関東管領がすぐに対立することになる）、多摩は混迷の度を深めて行く。

鎌倉公方は、足利家の一員が務め³⁷、関東管領には、鎌倉時代に宮将軍（第6代征夷大將軍、宗尊親王^{むねたか}）に付き従ってきた京都の武士である上杉重房（将軍が京都へ追放された後、足利家の家老職として関東に残った）の子孫が代々受け継ぐことになるが、上杉禪秀の乱³⁸（1416）、長尾景春の乱³⁹（1476）を経て戦国時代（越後長尾—上杉謙信、後北条—北条早雲、甲斐武田—武田信玄による関東争奪戦とその長期化）に突入し、武蔵在住の武士団はその時々で右往左往することになる。特に、天文7年（1538）に古河公方（当初鎌倉公方と呼ばれていた職名が鎌倉を迫られて古河に移ったことから後にはこの名で呼ばれるようになる）から、相模国で新興勢力として注目された後北条氏が関東管領職を受けてからは山内上杉氏と関東管領が二人存在することになり、関東の支配権を主張する両者の覇権争いは激しくなる。1561年に山内上杉から管領職を譲られた越後長尾と管領職継続を主張する後北条の関東支配合戦が続き、戦国時代となる。

4. 結論

2節、3節を通して明らかになった多摩の武士団の独立を護るための「気風」を整理すると以下の4項目にまとめられる。

- ① 個人（一族）の財産保持・拡張にたいする偏執狂的努力＝一所懸命
- ② 武力（騎馬での戦い）で権利を主張
- ③ 権力者の資質に対する偏った評価（頭脳ではなく、血筋と腕力）

³⁷ 京都六波羅の足利政権の当主と鎌倉公方は最初の時期から仲が悪く、「鎌倉公方×幕府・関東管領」という図式が固定化する。

³⁸ 犬懸上杉家の上杉氏憲（禪秀）が次の管領を鎌倉公方の横やりで山内上杉家に取りられたことを憤慨して起こした乱。これに失敗して犬懸上杉家は没落する。

³⁹ 鎌倉公方（この時は鎌倉を迫られ古河にいたので古河公方という）に味方して山内上杉、扇谷上杉と対立していた長尾景春の起こした乱。扇谷上杉の家臣である太田道灌の活躍で鎮圧される。この乱の主戦場の一つは石神井・練馬・江戸城のあたりで行われ（江古田・沼袋原の戦い）、景春方の豊島氏が道灌に滅ぼされる。ちなみに豊島氏の練馬城は、現在の豊島遊園地のあたりにあった。

④ 集団行動の欠如、個別英雄的行動

この4項目が、歴史の潮流の中での多摩武士団の動きの中でどのように発現したかをまとめることによって、時代に左右されない「多摩の独立気風」をあぶりだす。

表 1 歴史を通じた多摩武士団の動き

時代	事件	年	種類	気風発現
植 民 地 時 代	倭建命の東征	4世紀?	↓	揺籃期
	奥州騒乱(武力養成)	801, 878	→	—②③—
	平将門の乱	939	↑↓	①②③④
	前九年・後三年の役(党の形成)	1051, 1083	→	①②③④
	保元・平治の乱	1156, 1159	→↓	①②③④
宗 主 国	源平合戦	1180~1185	×→	①②③④
	北条氏による粛清	1183~1213	×	—③④
	承久の変(全国制覇)	1221	→	①②③④
混 沌	元弘の変(鎌倉崩壊)	1331	↓	①②③④
	上杉禅秀の乱	1416	×	①②—④
	長尾景春の乱	1476	×	①②—④

種類：↓抑圧 →遠征(代理戦争) ↑叛乱 ×内乱

上記の表から分かる通り、結論として挙げた4つの気風は、奥州騒乱を経て明確に表れるようになる。図抜けたリーダーがいなくなる混沌期になると、武士達はリーダーを求めて右往左往することになるが、豊臣・徳川の対立時代を思わせる「保険を掛ける行為」も見え始めてくる。

引用・参考文献

- 1) 倉野憲司校註「古事記」岩波文庫(1999)
- 2) 佐佐木信綱編「新訓万葉集 下巻」岩波文庫(1978)
- 3) 板橋倫行校註「日本霊異記」角川文庫(1975)
- 4) 佐藤謙三校註「今昔物語 本朝世俗部」角川文庫(1980)
- 5) 早川厚一編「保元物語」和泉書院(1997)
- 6) 「日本の歴史3~11」中央公論社(1965)
- 7) 北山茂夫「平将門の乱」講談社学術文庫(2005)
- 8) 福田豊彦「平将門の乱」岩波新書(1981)
- 9) 安田元久「源義家」吉川弘文館(1989)
- 10) 斎藤慎一「中世を道から読む」講談社現代新書(2010)
- 11) 田代脩「武蔵武士と戦乱の時代」さきたま出版会(2009)
- 12) 黒田基樹「図説 太田道灌」戎光祥出版(2009)
- 13) 鈴木哲雄「中世関東の内海世界」岩田書院(2005)

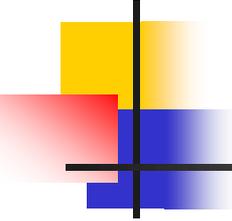
多摩地域における 古代・中世の「独立」気風



多摩の中心
大國魂神社

多摩大学 地域活性化マネジメント・センター

諸橋 正幸



仮説提示

- 武士団形成を通して見えてくる多摩人の気風
 - 個人(一族)の財産保持・拡張への執念＝一所懸命
 - 武力(騎馬での戦い)で権利を主張する
 - 権力者の資質に対する偏った評価
 - 頭脳より血筋と腕力
 - 集団行動の欠如、個別英雄的行動

1. 多摩地域の定義

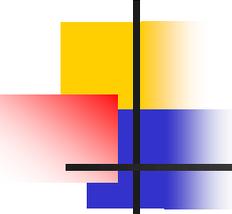


多摩とは...

坂東八国のうち
武蔵国
相模国
の両国を合わせた地域

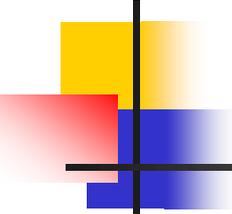
地形的特徴...

東を利根川、
西を関東山地、
南を東京湾・相模湾
で護られ、唯一開けるのは北



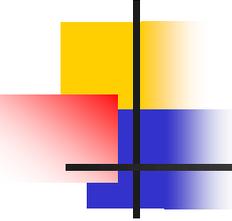
2. 多摩の地政学的位置づけ

- 主産業
 - 米作—江東区は不向き、丘陵の裾野
 - 丘陵の上は水利の便が悪い
 - 低地(海岸地方)の大規模治水・干拓事業をする土木技術がない
 - 官営馬牧—軍用馬の放牧
秩父牧、武蔵4牧、小野牧、...
- 中央政権、国衙、土豪
 - 米作は労働集約型産業—人を集められなければ没落
 - 荘園経営⇒党の形成
- 陸奥征伐の前線基地
 - 兵士養成、軍馬の放牧、武器・防具の生産
- 貴種崇拜と婚姻形態



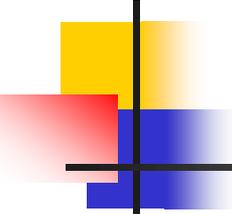
3. 歴史潮流—上古～平安初期

- 坂東は大和政権の植民地
 - 倭建命(日本武尊)の東征(4世紀頃?)=植民地化
 - 街道整備による中央集権強化、重税→貧富の差拡大、豪族の誕生
 - 防人の兵士供給地、陸奥への遠征拠点
 - 軍装は自前(武器の製造技術の蓄積、軍馬の育成)
 - 国民皆兵制から健児の制へ(職業軍人の発生)
 - 司令官は京都から派遣(坂上田村麻呂、小野春風)
 - 民衆の管理政策
 - 国分寺、国分尼寺を中心とした仏教の布教活動
 - 朝鮮からの渡来人の強制移住による文化・技術普及活動(高麗郡、新座郡)
 - 坂東と陸奥の住民の相互強制移住(古代の屯田兵)
 - 陸奥からの税(主に、金・馬)の運搬経路
 - 「僦馬の党」の形成、暴徒化



3. 歴史潮流—平安中期

- 国司の土着化(土豪、武士団の形成)
 - 土着豪族の出現
 - 国司(受領)が任期中に蓄財
 - 任期が終了しても京都へは帰らず土着化(地元の女性と結婚)
 - 本質は地元民が中央の権威を手に入れたことになる(当時の結婚形態から)
 - 新任受領との対立
 - 有力豪族は、陸奥への出征拠点の常陸・下野・下総・上総で出現
 - 国司が土着化する背景
 - 新田開発と開発田の帰属—『墾田永代私財法』
 - 新田の経営権維持のため、中央有力貴族・社寺への荘園寄進
 - ⇒中央の権力争いに荘園の将来が依存する
 - ⇒土地争いに備えた荘園武装化・共同防衛(伴類)
 - 巨大豪族の出現
 - 桓武平氏末裔の高望王⇒息子たちの土地争い⇒将門の乱(935)



3. 歴史潮流—平安中期

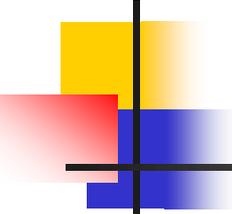
■ 土着豪族の叛乱

- 「武人」将門を叛乱の頭にまつりあげた土着豪族たち
 - 政府とのパイプがあった桓武平氏嫡流、貞盛 × 無冠、将門
 - 各地の受領(政府側) × 土着豪族
 - 武蔵: 源経基 × 興世王
 - 常陸: 藤原維幾 × 藤原玄明
 - 土豪らが将門のもとへはしる
 - 将門軍、国衙襲撃(939)
- 「新皇」将門と土豪たちの離反
- 乱の背景
 - 軍馬育成を核に軍事力を高めた将門
 - 反権力のもとに結集した「板東」(板東が一つになった初めての例)
 - 戦勝側主要人物(藤原秀郷、平貞盛)の京都志向
 - 一族の争いの外にいた平良文(村岡五郎)の子孫⇒板東への勢力伸張

3. 歴史潮流—平安後期～鎌倉

■ 傭兵化する武士団

- 治安警察トップに採用される地元武士団
 - 坂東の治安の悪さ
 - 政権の正規軍では治安維持できず
 - 坂東各国に検非違使、押領使、追捕使設置
 - トップに地元有力土豪←権力側について領地安堵
 - 土地の名前で呼ばれる土豪たち: 秩父、鎌倉、河越、江戸、...
- 大和政権内部の権力闘争への参加
 - 有力貴族(摂関藤原家)の私兵となる畿内武士団(清和源氏、伊勢平氏)
 - 源平に仕える坂東平氏←権力側について領地安堵
 - 頼光の四天王: **渡辺綱**、**坂田金時(公時)**、**卜部季武**、**碓井貞光**
 - 頼信と**平忠常**の乱(1031)後の河内源氏と坂東武士の結びつき
 - 前九年・後三年の役



3. 歴史潮流—平安後期～鎌倉

■ 政権中枢にせまる武士団

■ 保元・平治の乱

- 保元の乱(1156):後白河天皇、崇徳上皇の争いに加担する武士団
- 平治の乱(1159):二条天皇、後白河上皇の争いが発端⇒
実質は源平の武士たちの戦闘⇒
武士(平清盛)が実権を握る
- 乱に巻き込まれた兵士はわずか(数百人)
- 乱の後に荘園の収奪(政権の名のもとに)が始まる⇒知行国

■ 源平合戦(六年戦争、治承・寿永の乱、1180-1185)

- 頼政・以仁王の平家打倒宣言
- **頼朝の挙兵**—坂東(特に多摩の武士団が参戦)
- 壇ノ浦での平家(伊勢平氏)滅亡
- 鎌倉幕府の成立

3. 歴史潮流—平安後期～鎌倉

■ 頼朝挙兵当時の多摩

■ 党の形成

- 荘園の領主(惣領)を中心とした親類の集まり(本家・分家)
- 土地の分割相続が党を形成する基となる
- 親族を限定(皇族の臣籍降下)する仕組の欠如⇒際限のない荘園拡張欲求
⇒絶え間ない土地争い

■ 頼朝挙兵当時の多摩の党

- 相模国: 鎌倉党(大庭、梶原、長江、長尾、...)、三浦党(三浦、蘆名)
- 武蔵国: 秩父党(秩父、畠山、河越、小山田、江戸、豊島、葛西、...)
武蔵七党(横山党、猪俣党、野与党、村山党、丹党、児玉党、西党、私市党)
その他の中小党(足立党、熊谷党、比企党、...)
- 房総には大きな党(千葉、上総)—将門、忠常のDNA

3. 歴史潮流—平安後期～鎌倉

■ 鎌倉政権下の多摩武士団

- 源頼朝・北条時政による粛清
 - 政権樹立に協力した武士団は伴類ではなく家来
 - 謀反の恐れのある惣領は暗殺
 - (上総広常)、河越重頼、梶原景時、比企能員、畠山重忠、和田義盛、...
- 全国に領地を広げる多摩武士団
 - 多摩は植民地から宗主国へ
 - 承久の変(1221)で完成形
 - 手柄で得る新たな所領⇒元寇で破綻
- 元寇に影響された戦術の変化
 - 個人の手柄を重視する騎馬戦が通用しない戦い
 - ⇒多摩武士はそれでも、騎馬にこだわる⇒勝てるのは平地の戦い
 - 山城籠城とゲリラ戦法の誕生⇒楠正成に代表される西国武士

3. 歴史潮流—室町、戦国

■ 混沌の世界

- 元弘の変(1331)でのリーダーの選択
 - 鎌倉幕府を崩壊させた新田義貞か
 - 後醍醐天皇と京都を制圧した足利尊氏か
 - 血筋(家格)で尊氏
- 多摩を統べる鎌倉府—地方出先機関
 - 鎌倉公方(府のトップ)と関東管領(公方補佐役)の反目
 - 公方側の没落
 - 管領上杉家の分裂—山内、扇谷、犬懸
 - 有力家臣団—長尾、太田、豊島、...
- 戦国
 - 越後長尾(上杉謙信)、後北条(北条早雲)、甲斐武田(武田信玄)
 - 関東管領職の本家争い—北条×上杉

4. 結論

■ 下記の気風は、時代独立のものか

- ①一所懸命 ②武力至上 ③権力者＝英雄 ④集団行動欠如

時代	事件	年	種類	気風発現
植 民 地 時 代	倭建命の東征	4世紀?	↓	揺籃期
	奥州騒乱	801, 878	→	-②③-
	平将門の乱	939	↑↓	①②③④
	前九年・後三年の役	1051, 1083	→	①②③④
	保元・平治の乱	1156, 1159	→↓	①②③④
	宗 主 国	治承・寿永の乱(源平合戦)	1180~1185	×→
北条氏による肅清		1183~1213	×	--③④
承久の変		1221	→	①②③④
混	元弘の変	1331~1333	↓	①②③④
	上杉禪秀の乱	1416	×	①②-④
沌	長尾景春の乱	1476	×	①②-④

↓抑圧 →遠征 ↑叛乱 ×内乱